中学校

学問の世界にふれ、進路を考える

―三年生　総合的な学習の時間の取り組み―

附属中学校・教諭　中嶋　たや

一　総合的な学習の時間

今年度の三年生は、総合的な学習の時間（後期）に、「学問の世界にふれ、進路を考える」をテーマにして取り組みを進めている。

今回の取り組みの目標は、

〈一〉学問の世界の深さと広がりにふれ、自分の進路を考える契機にする。

〈二〉興味・関心のあるテーマを選び、専門家に直接聞いたり、文献等の情報を集めたりして、「卒業論文」に、まとめる。

〈三〉事前の連絡、取材、事後の報告等の活動を通して、人と交流し取材する能力を高める。

である。

これを実現していくために、大学の先生の特別講義・奈良教育大学研究室訪問・附中版「ようこそ先輩」・卒業論文作成に取り組んでいく。

このうち、大学の先生の特別講義については、六月七日と六月十一日の両日にすでに終えている。これについては、本誌二十四ページをご覧いただきたい。

二　卒業研究の取り組み

今、生徒たちが取り組んでいるのは、卒業研究である。大学の先生の特別講義をヒントの一つとして、これまでの総合的な学習の時間に学んだことや教科学習の中で学んだことの中から、興味・関心があり、調べ甲斐のある課題を自分で設定して研究を進めていくのである。

とはいえ、生徒たちが、一から考えてテーマを設定していくことは、難しい面もあるので、論文の構成なども含めて、次のように生徒に提示した。

卒業論文について

三年間の学習の成果の総まとめとして位置づける。全員の論文を文集にまとめる。

［テーマ例］

(1)総合的な学習に関連して―学年劇、国際交流、臨海学習、修学旅行などから

「民話・伝承にみるサル―孫悟空、さるぼぼ……」「演劇と音響」「信州の風土と伝統のわさび漬け」

(2)特別講座のお話をきっかけとして

(3)各教科の学習の中から

国語「若者言葉を考える」「平城京と万葉集」「奈良の方言研究」

(4)学校生活の中から

「校則を考える―奈良市内の中学校の校則を比較して―」「平和の集いの歴史」「附中生らしさとは―卒業生に聴く―」

［卒業論文の構成］

（B5判四〇〇字詰原稿用紙を使用）

一　はじめに　一枚程度

二　研究の動機・テーマ設定の理由　一枚程度

三　研究方法と研究の仮説　一枚程度

四　本文　一〇枚程度

五　結論　一枚程度

六　資料　分量制限なし

七　参考文献・参考資料一覧　一～三枚程度

八　学習の感想　一枚程度

六月十八日に、学級で担任から提示されたテーマ例を参考にテーマを考え、六月二十八日・七月九日に、設定したテーマをもとに分けたグループごとで、テーマの検討・具体化を行った。

生徒たちの取り組みの様子を見ていると、多くの生徒は、漠然と興味を持っていることをあげることで、

大きなテーマを設定することまではできても、そのテーマについて深め、論文の形に仕上げていくために、テーマの中身を絞り込んでいくことに苦労するようである。

今まで、与えられた課題について調べたりまとめたりすることは、経験しているものの、今回のように自分でテーマを設定し、論文という形にまとめていくということについての経験がほとんどないということ、四〇〇字詰原稿用紙一〇枚という本文を書くために、どれだけの準備が必要かについて、なかなかイメージができにくいということがあるのかと思う。

個々のテーマについての内容の絞り込み・具体化のために、テーマについての設定の理由・仮説を考えさせた。その上で、個々に話をして、仮説の内容などについて検討を行った。

生徒が設定したテーマ等の一例を紹介する。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○テーマ

「ドイツと日本の環境の違い―リサイクル運動について」

○テーマ設定の理由

最近、日本はゴミが急激に増え続けています。近年に発明されたプラスチックも燃やすとダイオキシンがでるし、日本は減ることなくゴミが増え続けています。しかし、ドイツは道ばたにゴミが一つも落ちていません。それに、ゴミの量は、年々減ってきています。日本とドイツは、なぜこんなにも違うのか？　ドイツは、どのようにして、ゴミというものを減らしているのか、そのリサイクル運動について知りたいと思ったからです。

○仮説

例えば、ドイツの人は、ハデな生活はあまり好まず、質素な生活が、昔から続いているから、日本よりもはじめから、ゴミが少ないのかなあと思う。

道ばたにゴミが落ちてないのは、罰金とかがあるからだと思う。それに、リサイクル運動に力がはいっているからかなあ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

三　夏休みの研究の進め方

一学期は、テーマの具体化を図ることと、夏休中にどのようにして研究を進めるかの計画を立てることで終わっている。

生徒は夏休みを使って、自分が設定したテーマを深めるため、インターネットでの検索や資料の収集に取り組んでいる。夏休み中については、研究に行き詰まったときなど、担当の教官や学年の教官が学校に来ている日に、研究について相談するように指導している。あわせて、テーマに関わって、専門家を尋ね、インタビューすることも呼びかけている。

夏休みの前半に、資料の収集や検討・インタビューを行ったのち、それらをまとめて下書きすることまでを行い、二学期の総合的な学習の時間を使って、下書きの見直しや推敲・資料の整理をし、先に示したような形に整えて清書し、論文として完成させることになる。

今までの附中での学びの集大成として、すばらしい論文が数多く完成することを願っている。

四　奈良教育大学研究室訪問

卒業研究を進めていく間の九月二十四日には、奈良教育大学研究室訪問を実施した。卒業研究を進めていくための手がかりとなるように、研究テーマに関わる研究室を訪問した。また、直接には関係なくとも、大学の雰囲気を肌で感じ、研究を進めていくための姿勢といったことを学んでいってくれたことと思う。

五　まとめとして

後期の総合的な学習の時間の最後に、「ようこそ先輩」の附中版を計画している。来てくださる先輩は、マリンバ奏者の前川典子氏と青年海外協力隊（モンゴルでの活動）の八陣知広氏のお二人の方である。一〇月八日の五・六限目に来ていただく予定である。

この「ようこそ先輩」のあと、後期の総合的な学習の時間のまとめの時間として、卒業研究の発表会を予定している。卒業研究だけでなく、特別講座・研究室訪問・「ようこそ先輩」のすべての取り組みを通して得たことが、どのような形の発表になるのか楽しみである。

小学校

全校が新しい風になって

附属小学校・教諭　中窪　寿弥

■新しい児童委員会の出発

四月二十四日、新しい児童委員が高学年集会で選ばれました。六年生七人からなる児童委員が張り切って初めに取り組んだ仕事は、今年一年間の児童会の方針づくりです。

方針づくりで大切にしていることは、みんなの学校生活をより豊かに高めるための願いを出し合うこと。六年生集会や高学年集会で出された声に基づいて、児童委員たちが考えた今年の大方針は、「全校みんなの願いをみんなで力を合わせてかなえる」です。そして「いろいろな学年の友達をふやす」と「楽しく学びやすい学校」という二つの柱で大方針を支えることになりました。

リレーカップ　全校集会の様子

■できあがったクラスの旗を先頭に

六月十五日、第三十二回教育研究会を迎えました。教育カリキュラムの全体像を示すため教科外教育で力を入れている児童会活動の一場面として、全校集会も公開することにしました。

児童から出された願いの中にリレー大会というものがありました。サッカーのワールドカップが開かれたこともあり、児童委員が考え全校からも一番人気のあった「二〇〇二附小リレーカップ」という命名のもと、リレー大会が開かれることになり、研究会では、その取り組みの一環を見せることにしました。

研究会当日、全校児童が体育館に集まると、待っていたようにステージの幕が上がり、掲示部が作った「走ろう！新しい風になって」というテーマの文字と疾走するチータや子どもなどの絵が目にとびこみます。

各種目でクラスがまとまって力を出せるように、クラスのシンボルである旗がこの日は二枚紹介されました。

白い布に、所狭しと学級全員の足型が押されたのは一年二組の旗。ステージを走って全校から歓声を集めたのは四年二組のこいのぼりの旗。ともに担当の五、六年のクラス委員といっしょにつくりあげた旗です。

次に登場するのは、各組団をまとめる六年生の総団長と学級の団長です。リレーカップは全校縦割りの組対抗なので、それぞれオリジナルの応援が一組団、二組団、三組団と続きます。新しい応援に取り組み、うまくいかなかったところもありましたが、そこはご愛嬌。集会の後、さっそく団長会議が開かれていました。

最後を飾るのは、音楽部のリードによる全校合唱。曲は『あつまれ！　笑顔』。この歌詞の中からテーマ「走ろう！　新しい風になって」が選ばれたのです。

こうして学級、クラス委員、専門部といった様々な集団が、児童委員会の組織のもとに、一つの全校行事に向けて取り組むという大きな高まりが感じられた集会になりました。

■走った！　新しい風になって

リレーカップは雨天のため一日延びましたが、たくさんおうちの方も来られ、絶好の天気のもと、六月十九日に開会されました。各組団に分かれた応援席からは応援する必死の声がとびかい、クラスの旗が大きく揺られます。一本のバトンに、走るクラスみんなの気持ちと応援する仲間の視線が重なります。一周以上の差が開いてしまっても、最後まで気をゆるめず走りきったクラスを、全校の拍手がむかえます。順位より練習の時のタイムを一秒でも縮め、学級新記録を目指したクラスもあります。

「おりかえしリレーでみんな速く走れるようにくっついて順番をまった」（一年生）

「ハードルおりかえしリレーであともう一周あったら勝っていたのに」（二年生）

「クラスみんなでがんばって一位にはなれなかったけど最高記録が十三秒も速くなってよかった」（六年生）

さわやかな新しい風がいっぱいふいた一日になりました。

リレーカップ　競技の様子

幼稚園

動物とのふれあいの中で

附属幼稚園・教諭　浜田　紀子

■出会い
～あっ、うさぎさんだー～

附属幼稚園には、子どもたちと一緒に暮している生き物がたくさんいます。春にはチョウチョウやアオムシ、小さなアリや、植木鉢の下に隠れているダンゴムシ、雨上がりに現れるカエルやカタツムリなど。

セミの声が聴こえてくれば、もう夏。秋になれば子どもの森でバッタが跳びはね、園庭をトンボが飛び回る。どんな小さな生き物にも子どもたちは一喜一憂しながら、一生懸命関わっていきます。

そんな中でも子どもたちにとって特別大好きな動物がいます。初めて幼稚園にやって来た日に多くの子が、まず駆け寄って覗き込む飼育小屋。そこには五匹のウサギとカメ、インコ、そしてアヒルが、どんな日も子どもたちを迎えてくれます。初めての園生活に期待とともに不安や緊張を抱いてやってくる子どもたちの心を和ませ、笑顔に変えてくれるのです。

動物たちの朝ごはんをつくる園児たち

アヒルにエサをあげる子どもたち

■毎朝の楽しみ
～今日もごはんもってきたよ～

野菜やパンくずなどの入った袋を大事そうに抱えて来る子どもたち。動物たちにあげようと家で、あれこれ考えながら持ってくるのです。母親と一緒にエサをあげてから「いってきまーす」と手を振る子、先生や友だちとあげるのを楽しみにしている子と様々。

もちろん、そこで生まれる子ども同士のふれあいもあります。ウサギがムシャムシャ、エサを食べると思わず嬉しそうに顔を見合わせたり、アヒルがバタバタと羽根を振るわせるとびっくりして一緒に飛びのいたり、そんな中で同じ気持ちを感じている友だちの存在に気づいていったりするのです。

うさぎにえさをあげる

家から持ってきた野菜を分け合ったり、もちろん幼稚園にある草花も立派なごちそうとなるので、その場所を教えあったりしながら楽しみを増やしていくのです。

■動物当番
～ぼくがつくった朝ごはん～

子どもたちがそれぞれエサをもってくる以外にも、毎日の当番としてエサやりがあります。年長児と年中児が各クラス、順に一人ずつ、毎日四人で行う動物当番です。家庭から野菜や、パンなどを持ってきてもらい、動物たちの朝ごはんを子どもたち自身がつくります。新学期当初はまず、昨年度から経験のある年長児だけが行い、続いて年中児も仲間入り。年長児は子ども用包丁で野菜や果物を切り、年中児も最初は手でちぎる仕事から徐々に慣れてくると小さな包丁を使って手伝うようになります。道具の準備から、エサの作り方、後片付け、そしてエサやりまで、どの作業も年長児が年中児に教えてあげながらできるように、保育者も手助けしていきます。

このような動物たちとのふれあいは、子どもたちに多くのことをもたらしてくれます。動物たちと向き合う時のあたたかい気持ちを、子どもたちがいろいろな場面で友だちと一緒に感じていけるようにと思っています。